

AnotherView

視点を発見するパーソナリティ・ノート

パーソナリティ・ノート「AnotherView」の刊行は、様々な方のものごとの捉え方を書き留めていこうという企画です。「AnotherView」は美専（長野美術専門学校）が発行しますが、登場するのは美専の学生や先生だけではありません。社会の人にも、時には子どもにだって、自身の視点を表わしていただきたいのです。それらの方々の疑問やひらめき、課題や考えなどがここに明らかになっていくことで、多様な価値観が共鳴してさらなるクリエイティブが始まるでしょう。「AnotherView」はものごとの見方を変えてくれる、パーソナリティ・ノートなのです。

This time's personalities

上野咲来
丸山大空
今村小春

アートの世界も 化学も好き。



上野咲来

選択肢には大学の理系学部もあって「美術」か「化学」か、ギリギリまで迷いました。最後の決め手は将来就きたい職業を考えたときに「絵の仕事」により惹かれたためです。
(com. デザイン総合学科・1年次生)

——2025年2月に開かれた「美専展」では、ファンタジー世界の「地域紹介本」をイメージして制作した作品を出展。オールカラー27ページのボリュームや、登場するキャラクターや背景、建築物などの緻密な描写も高く評価され、見事「優秀賞」を獲得しましたね。

「冬休みもずっと制作に打ち込んで頑張った作品なので、受賞はとてもうれしかったです。『生き物の図鑑』を表現したくて取り組みました。見せ方を勉強する機会にしたいと思い、授業で言われたことを思い出しながら、余白を取ったりして読みやすい作りを心がけました。ファンタジー系の作品なので、見てもらえた人たちにワクワクしてもらったり、冒険心をくすぐられたりしたらうれしいなと思いながら制作しました。」

——絵を描くことが好きで中学・高校と美術部に所属していたということですが、美専への進路はどのように決めましたか？

「父親がドラクエ（ドラゴンクエスト）をやっているのを小さい頃から見ていたらいいんですけど、家にトレーシングペーパーっていう紙があって、ドラクエの攻略本開いて、トレーシングペーパーを載せてなぞり、クレープで塗っていたみたいです。そんな感じでずっと絵を描いていた子どもだったのですが、同時に理科も小さい頃から割と好きでした。高校では特に化学が好きだったので、地元の国立大学の理系の学部も考えていました。実験が結構好きだったし、論理的なサイエンスも好きで、同

時に絵を描くことも好きで……。理系に進むか、美術の道に進むか、結構悩みましたね。ギリギリまで。考え抜いた末、最終的に美専を選んだのは、将来就きたい職業を考えた時に絵の仕事をしたかったと思ったからです。」

——この1年美専で学んでみてどうですか？

「美専に来てすごいなと思ったのは、今まで周りに絵を描く人はそれなりにいたんですけど、もうここはほぼ全員が描けて、漫画やイラストが本業みたいにとっても上手い人たちがばかりだということです。みんなが見ている世界がそれぞれ違って、表現によってその人の価値観や物の見方がわかったりするのが面白くて、毎日が新鮮です。あと実際にその世界の第一線で現役で働いていらっしゃる講師の先生方の話も聞けるので、勉強になりますね。」

この1年、毎日確実に5時間以上は描いています。学



校に行ってもずっと絵を描いているし、家に帰ってもずっと絵を描いています。絵を描くこととゲームしかしてないみたいな、とんでもない生活で(笑)。絵を描くこと以外の経験があまりない方だと思うので、まだまだやりたいことはいっぱいあります。」

——美専での残る3年間の目標は？

「一番は、今の将来の目標がゲーム会社に就職することなので、そのために「画力をあげたい」ということです。その延長線上に「ワクワクするような世界観を創り上げたいな」というのはあります。それにプラスして、リフレッシュの意味でも、自然や生き物全般が好きなので、いろんなジャンルを描いていこうと思っています。2年次からは、絵だけではなく、3Dの勉強をしてゲーム作りにも挑戦してみたいと思っています。」

心が豊かになったような感覚。

街並みがどんなふうにデザインされているのか、これまでと違った視点で眺められるようになり、心が豊かになったような感覚がありました。
(ビジュアルデザイン科3年制学科・3年次生)

丸山大空



——美専で得られた“新たな視点”はズバリ、何でしたか？

「いつも漫然と眺めていただけの『街並み』が、デザインを学んでからは「建物がなぜこの形で、この色なのか」や「ロゴやポスターのデザインや配色」などにも目が行く



ようになりました。そういう目線で街を見ると、街並みというのはバランスが整っていて、人々が生活しやすいよう設計されているということがわかり、心が豊かになったような感覚がありました。遠くから見ても「他と差別化できるデザイン」かつ、「景観を崩さない色彩」など、プロのデザイナーが制作しているものは洗練されていると思います。この学校で学んだことで、こんな風に“新たな視点”で街を眺められるようになりました。

僕にとっての制作は「自分の日々や心を豊かにするもの」です。『自分に才能があるかわからない』と悩んでいたら、美専に入ることによって何か変わるきっかけが芽生えるかもしれません。最初から才能はいらないと思います。この学校に来て思ったのは、“才能のあるなし”よりは、“美術が好きか嫌いかの方が断然大事”かなと。」

“人”が好きになりました。

この学校に来て人を好きになりました。大好きなことに熱中できた、かけがえのない2年間でした。
(ビジュアルアート科2年制学科・2年次生)

今村小春



——この2年間はどんな時間でしたか？

『学び方を学んだ』2年間でした。自分が何をしたらいいのか、どう学んだらいいのか入学当初は全くわからない状態でしたが、先生方や友達と一緒に高め合ってく感じがすごく良かったです。実は高校時代までの私は、学校が楽しめず、時に孤独を感じることもあったのですが、美専に入って、自分と同じ考えを共有できる仲間と初めて出会って、だんだん『ああ、自分を出してもいいんだ……』と感じられるようになりました。性格が180度変わって、人が好きになれたんです。『1人じゃない』と思えるのはすごく大事だと思っています。

描いている時間はとても楽しくて、特に自分のアイデアが個性的なものとして生まれた時が1番嬉しいです。人

を真似るだけじゃ絶対できない、自分にしか描けないものが生まれた時、“よっしゃ。私天才だ！”ってなります(笑)。熱中すると何時間でも描いています。

卒業後は製本会社で働きます。『本になる』ってとても素敵なことだなと思います。その人の表現したかったものが形になり、一区切りもついて、そして未来に向けて長く残されていきますよね。そこが『製本』の魅力です。仕事をしながら、これからも自分の大好きな「絵」も、しっかり描き続けていきたいと思っています。」



This time's fact

美専展 2025



年度ごとの総合制作を公開する美専の一大プロジェクト。令和6年度は、例年以上の「学生主導」の体制で企画立案・広報・搬送・会場作り・来館者案内などを積極的に行った。

2025年2月21日～23日／長野市・北野カルチュラルセンターで開催。来場者660人。

美専展グランプリはビジュアルデザイン科1年次生の課題ポスターに

毎年しのぎを削る「美専展グランプリ」では、ビジュアルデザイン科の1年次生が総合制作で取り組んだ「チカラ」がテーマのポスターデザインの中から、内山彩夏さんの「数字のチカラ」が最高賞を受賞！1年次生のグランプリ獲得は初の快挙です。

『年間の集大成として学びの統合性があること、デザイン思考の重なりや試行錯誤といった制作プロセスとその完成結果、周囲へのメッセージ性』などが高く評価されました。



キャラクターグッズなどの販売も
今回の美専展では、初の「製品販売」を行いました。オリジナルのポストカードやアクリルキーホルダー、ステッカーなどの他、世界に一つしかないハンドメイドの手芸品・工芸品も販売しました。中には早々に売り切れてしまったものもあり、来場者からも好評でした。

find Another View



好きなことから、はじめよう！
学校法人 クリエイティブA
長野美術専門学校